

### 3 海や生き物たちに現われた異変

【チッソ工場が工場排水を海にたれ流して、海に住む生き物とかはどうなったの？】

チッソ工場では、1932年(昭和7)からビニールなどの原料になるアセトアルデヒドの生産を始めました。そのアセトアルデヒドを作るときに、強い毒性をもつメチル水銀が発生し、工場排水に混じって海に流れ、魚や貝を汚染していきました。

チッソ工場での生産量が増えるにつれ、海の汚染がすすみ、1950年代前半(昭和20年代後半)から、魚が海面に浮いたり、貝が死んだり、海草が育たなくなったりするようになりました。とくに、工場排水が流された水俣湾は汚染がひどく、たくさん水銀を含んだヘドロが海の底にたまるようになりました。

また、不知火海の海岸近くでは、魚を食べたネコが狂い死にしたり、鳥が飛べなくなって空から落ちてくるなどの異変がみられるようになりました。えさに魚を混ぜてあたえていた家では、ニワトリやブタなどの家畜が狂ったようになって死んでしまうこともありました。

人間が病気になる前に、小さな生き物たちに  
まず異変が起きていたんだね。



### 4 水俣病の発見と差別

【水俣病になった患者さんたちのくらしはどうだったの？】

1956年(昭和31)、人間にも原因不明の病気が発生していることが初めて確認されました。原因が分からないため、病院ではどんな治療をすればいいかも分からず、患者さんは満足な治療を受けることもできずに苦しみながら死んでいきました。

水俣病が発生した当初は、原因がわからずうつる病気とまちがわれ、患者さんの家を消毒したり、病院でも患者さんを隔離したりしたので、病気がうつると思われたり、奇病と言われたりして、まわりの人からいじめを受けたり差別をされるなど、大変つらい思いをしました。

病気の原因として魚が疑われるようになってから魚をとっても売れなくなってしまったり、働き手が病気で倒れたりして日々の収入がなくなり、そのうえ病院にお金がかかったりして、患者さんやその家族の生活はとても苦しくなりました。

水俣病の原因があきらかになり、うつる病気ではないと分かってからも、チッソの影響を強く受けていた水俣では、患者さんをうとましく思う雰囲気があり、患者さんを取りまく環境はつらいものでした。同じ市民でありながら、患者さんとそのほかの市民との対話はとだえ、地域社会のつながりまで壊れてしまいました。

また、患者さんだけでなく水俣市民がよその人から差別されることがありました。それは、水俣病が空気や食べ物でうつったり、遺伝したりすると思われたり、水俣地方特有の病気(風土病)とまちがわれたりしたためです。水俣出身だということで就職や結婚をことわられたり、水俣を通るときは電車やバスの窓を閉めたりするなどの差別を受けることもありました。そのため、市民が水俣出身と胸をはって言えないことも多かったのです。